

甲状腺外科草子 87

古文復習：万葉の月見る月

杉野 圭三

古来、月は人々の心の琴線をかき鳴らし、多くの歌が詠まれてきた。

月々に月見る月は多けれど月見る月はこの月の月（よみ人知らず）

作者不明だが、人口に膾炙されてきた有名なものであり、月を見上げるたびに多くの人が口ずさむ。



万葉時代の月を詠んだ歌を並べてみる。

尚、万葉集全集は恥ずかしながら難解すぎるので上記の本を参考にした。特に、中西進先生は万葉集に関する第一人者で解説も分かり易くお勧めである。

塾田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（八 額田王）

新羅遠征の際、愛媛県松山付近で出陣する時に額田王が詠んだ勇壮な歌。白村江の大敗がなければ歴史的に大宣伝されたに違いない。

東（ひむがし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへり見すれば月傾（かたぶ）きぬ（四十八 柿本人麻呂）

草壁皇子（天武天皇と持統天皇の子）の遺児である軽王子（かるのみこ、後の文武天皇）が安騎野で狩りをした時の歌。昇る太陽を軽皇子と沈む月を草壁皇子と捉えるのは安易すぎるとの意見もある。

振り放（さ）けて若月（みかづき）見れば一目見し人の眉引き思ほゆるかも（九九四 大伴家持）
三日月から一目見た女性の眉を発想する上品で純情な歌である。



三日月様々

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しき（九八二 大伴坂上郎女）
ぬばたまの夜霧と月の光の中で悲しみに浸る美女の情景？

春日山おして照らせるこの月は妹が庭にも清（さや）けかりけり（一〇七四 作者未詳）
後朝（きぬぎぬ）の別れの情感の歌であろうか。若者にはこの抒情はまだ分からないかな？



満月様々

天（あめ）の海に雲の波立ち月の舟 星の林に漕ぎ隠る見ゆ（一〇六八 人麻呂歌集）
まるで宇宙飛行士が詠んだ歌の様である。
ひさかたの月夜（つくよ）を清み梅の花 心開けてわが思（も）へる君（一六六一 紀（きの）少鹿（をしかの）女郎（いらつめ））

「遠いかなたの月夜が清らかなので、夜開く梅の花のように心も晴れ晴れとお慕いするあなたよ」
月待ちて家には行かむわが挿せるあから橘（たちばな）影に見えつつ（四〇六〇 栗田女王）
「月の出を待つて家に参りましょう、私の髪に挿して挿頭（かざし）にした橘の実が月光の中に映えてみえます」

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛（は）しき見もがも（四一三四 大伴家持）
雪上に月の光が輝く。この様な場面で梅を贈れば口説き落とせること間違いなし！

参考資料：万葉の秀歌（中西進）、万葉集、ビギナーズクラシックス、古代史で楽しむ万葉集（中西進）
（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2024年1月5日